

アメリカの大学におけるコメンズメントスピーチ (八)

ジョージ・ソウンダース、ビル・ワターソン

小笠原 はるの

遠藤 昌子

本稿では、アメリカの大学における二つのコメンズメントスピーチについて考察する。一つは、二〇一三年、シラキュース大学にて、作家ジョージ・ソウンダースが行ったスピーチで、もう一つは、一九九〇年に漫画家のビル・ワターソンがケニヨン大学で行ったスピーチである。両スピーチのあいだには二十年以上の開きがあり、その間、世界はめまぐるしく流動し、その時代に生きた若者は、変化を恐れ、抵抗することもあったが、やがては変化を受け入れ、さらに変化を起こすことを求められるようになった。そのような世界の動きを洞察し、その流れのなかをどのように生きてゆくのか、二つのスピーチはそのための指針を示すものといえよう。本論文では、それぞれのスピーチを紹介し、彼らの作品について考察したうえで、スピーチの翻訳を試み、これから社会へ出る若者への一助としたい。

一、ジョージ・ソウンダースについて

ジョージ・ソウンダースは、一九五八年、アメリカのテキサス州に生まれた。ソウンダースの翻訳を手がけている岸本佐知子は、彼のユニークな経歴を次のように紹介している。ソウンダースはコロラド鉱業大学で地球物理学を学び、その後、スマトラの石油探掘クルー、ビバリーヒルズのドアマン、シカゴの屋根職人、カントリー・アンド・ウエスタンのギタリスト、コンビニの店員、テキサスの食肉加工工場等のさまざまな職業に就く。三十歳を前にしてシラキュース大学創作科に入学すると、短篇小説の名手、トバイアス・ウルフラに師事し、卒業後は母校創作科で自ら教鞭をとりながら、『ニュー Yorker』、『ハーバース』などに精力的に作品を発表する。現在までに短篇集、中篇、絵本、ノンフィクションあわせて九つの著書があり、マッカーサー賞、グッゲンハイム賞をはじめ多数の受賞歴があり、「小説家志望者の若者に最も文体を真似される小説家」との異名をとる^{*1}（写真1）。近著で四作目にあたる短篇集 *Tenth of December*（十二月十日）は二〇一三年一月、それも年明けに発売されたが、すぐに「二〇一三年最高の一冊」という感想が、インターネットのメディア、SNS、Twitterなどで溢れ、同年一月三日付けのニューヨーク・タイムズ紙が「ジョージ・ソウンダースは、今年あなたが読むうちに最もすばらしい本を書いた」という記事を掲載した。^{*2}



写真1 ジョージ・ソウンダース
公式ホームページ <http://www.georgesandersbooks.com/about/>
(2014年8月10日取得)

「わからなさ」を読み解く

しかし、絶大な人気とは裏腹に、ソウンダースの作品は難解とされている。そこにはシニカルなユーモアが散りばめられ、挑戦的かつ実験的な、この世にはありえないストーリーが展開されている。混沌とした世界を笑い飛ばすような狂ったユーモアと、その思想に読者はこれまで

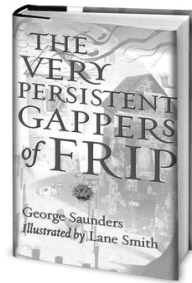


写真2 『The Very Persistent Gappers of Frip』（『フィリップ村のとてもしつこいガッパードも』 レイン・スミス絵、青山南訳）2006年

味わったことのない不思議で独特の感覚にとらわれる。例えば、子ども向けの絵本『フィリップ村のとてもしつこいガッパードも』は、ヤギを疲弊させる生物ガッパーに悩む村の物語であるが、ほかの絵本では味わえない奇妙な読解ができる（写真2）。村には三大家族が住んでいて、あるときガッパードもは一軒の家を集中攻撃する作戦を立てる。狙われた家は父子家庭で、父は、妻を亡くした過去から立ち直れないまままで頼りにならず、少女は残りの二家族に助けを請うのだが、断られてしまう。援助できない理由がこうだ。

あなたが大変な目にあっていることには心より同情いたします。けれど、いいづらいのですが、自分の人生の責任は自分でとったほうがいいとは思いませんか？ わたしたちのようにヤギからガッパーを排除できたら、あなたもきつと努力した、と思えることでしょう。（…）わたしたちのほうが努力したといたいわけはありません。^{*3}

近隣住民はそう言って、自分たちの家を、少女の家から遠ざけてしまう。困り果てた少女は、町でヤギを売り、

その資金を元に独りで漁業を始める。ガツパーどもは、攻撃対象を別の家に変え、このあとも物語は続く。ガツパーとは何を指し、自己責任を問う隣人と誰からも助けてもらえない少女とはいったい何者なのか。読者は、現実からかけ離れた奇妙なストーリーを楽しみつつ、最後のページをめくったあとも不思議な出来事やおかしな生物の正体がわからないままである。物語を完結させるためには、読書も登場人物と一緒に戸惑いながら答えを出すことを求められている。

中篇小説『短くて恐ろしいフィルの時代』も同様で、冒頭からして、ばかばかしく可笑しい設定となっている（写真3）。

国が小さい、というのはよくある話だが、〈内ホーナー国〉の小ささときたら、国民が一度に一人しか入れなくて、残りの六人は〈内ホーナー国〉を取り囲んでいる〈外ホーナー国〉の領土内に小さくなって立ち、自分の国に住む順番を待っていないかもしれないほどだった。

外ホーナー人たちは、へ一時滞在ゾーンにこそ身を寄せあつて立つている内ホーナー人たちを見るたびに何となく胸糞がわるくなったが、同時に、ああ外ホーナー人でよかったとしみじみ幸せをかみしめた。^{*4}

さらに読み進めると、このホーナー人たちの姿形は読者が思っているようなものではないことがわかってくる。



写真3 『The Brief and Frightening Reign of Phil』（『短くて恐ろしいフィルの時代』岸本佐知子訳）2005年

フィルは国境ごしに一人の内ホーナー女性に恋をした。全体的に縦長で、やや左に傾いているキャロルだった。彼女の黒くつややかなフィラメント、振り子のように揺れ動く半透明の皮膜、露出した背骨のゆるやかなカーブ、毛皮におおわれたグローブ状の突起物でしとやかにベアリングを掻くしぐさ、そのすべてにフィルはぞっこんだった。フィルは彼女の気を引きたい一心で、何気ないふうをよそおって「内ホーナー国」のまわりを何時間もぐるぐる歩きながら、中央部の囊（のう）を膨らませたりしほませたりして男性的魅力のアピールしたが、無駄だった。キャロルにはキャルという、巨大なベルトのバックルに青い点をつくつけて、それをさらにツナの空き缶に接着したような感じの内ホーナー人の恋人がいたのだ。^{*5}

このような、生物と機械がまざったような奇怪な人々が次々と登場するのである。そのうち、「内ホーナー国」がさらに小さくなって、中に住んでいた内ホーナー人の体が国外へはみ出してしまう。それを見た、平凡な外ホーナー人のフィルが内ホーナー人から税金を徴収することを提案する。それが、外ホーナー人たちに支持されたところから、フィルはあれよあれよという間に権力を手にしていき独裁者まで上り詰める。しかし、わずか数日間で彼はあっという間に転落し、「短くて恐ろしいフィルの時代」が終わりを告げる。しかし、物語はここで終わらない。フィルが消えても、「よりよい世界を夢に見る」乙女が存在し、「いつだって短いセンテンスで、わかりやすい正義が語られる、そんな世界を」を夢見るのである。

独裁は、良くも悪くも「よりよい世界を夢に見る」という善意や正義から始まる。そして、「いつだって短いセンテンスで、わかりやすい正義が語られる、そんな世界」である。笑い飛ばしながら読んでいるうちに、読者は居心地が悪くなってくる。そして、自分たちもまたそのシステムの一員であるまいかと考えるのである。

このように、ソウンダースの作品は、明確な答えや結末を提示しない。物語自体は笑えるし、引き込まれるのだが、期待するようなオチはなく、奇妙で曖昧な感覚がずっと残るのである。ソウンダースはアメリカ合衆国における敗者や弱者の視点から日常を描いている、と評されることがある。ガッパやホーナー人が「小説の主人公」らしくないという点では、おそらく敗者であり弱者でもあるが、しかし、敗者と勝者、弱者と強者といったわかりやすい対立構造を描いているのではなく、どちらかというところ、理解不能な「異形」を仕立てあげ、読者自身がその「異形」に何を投影するのか、自分の頭で考えて、想像して、答えをだせという、意識的な読み方が求められているのではないだろうか。

人生の目的とは何か

ソウンダースが二〇一三年にシラキュース大学で行ったコメントスピーチにもその意識を問う姿勢が見られる。人生の先輩として、自らが「人生で一番後悔していること」を例にあげ、人生の目的と目標が、成功から愛へと変わっていく過程をユーモアまじりにうったえる。

このスピーチは発表されるやいなやニューヨーク・タイムズに全文が紹介され、インターネット上でも何十万件と急速に共有された。二〇一四年四月には *Congratulations, by the way: Some Thoughts on Kindness* というタイトルで単行本として出版されるに至った（写真4）。

不安と自信と期待が入り交じった卒業生に対して行われるコメントス

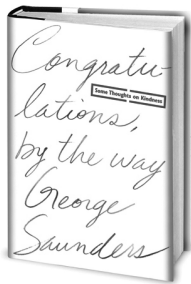


写真4 『Congratulations, by the way』2014年

スピーチには、勇気づけられる言葉、新しい視点を得られる言葉、人生の重要な示唆を与えてくれる言葉が満ち溢れている。ソウンダースのスピーチには、人の痛みを共有し、苦難のときほど、冗談でそれを笑い飛ばそうとする姿勢がうかがえる。どうにもならない状況で突破口が必要となったときぜひ読んでほしい。

【小笠原】

二、ジョージ・ソウンダースのコメンズメントスピーチ

(二〇一三年五月十一日 シラキュース大学にて)^{*6} (写真5)

なんであの時親切にしてあげなかったのか

ジョージ・ソウンダース

翻訳 小笠原はるの・遠藤昌子

卒業式のスピーチって、こんなパターンだ。どこかのオヤジがやってきて、ああ、昔はよかったなと振り返り、自分の人生は間違いだらけだったのに、偉そうに御託を述べる。あろうことか相手は輝かしい人生の門出に立つエネルギッシュな若者。今日のオヤジ役はほくだ。同じパターンでいくよ。

オヤジのいうことをきいてなんになる？ 小遣いをせびるかい？ それとも冷やかしてツイストでも踊ってもらおう？ まあいいからオヤジに聞いてみ



写真5 シラキュース大学でのコメンズメントスピーチ

<http://www.businessinsider.com> (2014年8月10日取得)

ろ。「今までで一番後悔したことって何？」って。聞かなくても、オヤジから言ってくることもあるし、聞きたくないでも、首根っこをつかまれて聞かされることもある。

じゃあ、ぼくが後悔していることは何だと思う？ 定職につかなかったこと？ いや、そうじゃない。屠殺場の解体作業？ あれはひどかったな。いやいや、それはまだいい。

じゃあ、酔った勢いでスマトラの川に飛び込んだこと？ ひよいと見上げると、三百頭ものサルが石油パイプラインに並んで糞をたれてやがる。ぼくが裸で口を開けて泳いでいる川めがけてだ。当然腹をこわし、死にかけて治るのに半年もかかった。後悔しているかって？ そうでもない。

じゃあ、あのときの赤っ恥？ ホッケーの大試合に出たときのこと？ ぼくが片思いしていた娘の前でこけて、悲鳴をあげながらオウンゴールをしてしまった。しかもスティックが応援席に飛んで、その娘にあたるところだった。後悔しているかって？ 全くだよ。

でもそんなぼくでも後悔していることがある。中学一年のとき、転校生がきた。仮にエレンと呼ぼう。エレンは小柄でシャイだった。年寄りじみた青い厚縁メガネをかけて、緊張したときなんかは、よく髪の毛を口にくわえていた。

クラスのやつも、近所の連中も、ほとんど彼女を無視し、たまにからかった。「おまえの髪、いい味する？」ってね。いやな思いをしていることは明らかだった。目を伏せて、うなだれ、居場所のなさに消えいりそうだった。そのうち髪を口にくわえたまま、すつといなくなつた。そのあと家に帰るとたぶんおかあさんがこう訊くだろう。「学校どうだった？」と。彼女は「うん、楽しいよ」と答える。「友達できた？」「うん、たくさん」。

学校に行きたくなくて、彼女が庭先でぐずぐずしていることもあった。そして突然、エレン一家は引越してし

まった。悲劇も事件も起こらなかった。ある日やってきて、あつという間にいなくなった。それだけのこと。

じゃあ、なんでそれを後悔するのか。四十二年たった今でも忘れられないのか。ぼくはまだ彼女にやさしかった方だ。いじわるなこともいわなかったし、何気なくかばったことさえあった。それでも、気になるんだ。

こういうことってあるよね。ちよつと青臭いけれど、なぜだか心に残ってしまう出来事。

ぼくが人生で一番後悔しているのは、なんであの時もつと親切にしなかったのかということ。目の前で苦しんでいる人がいるのに、ぼくといえは見てみぬふりをして、手を差し伸べなかった。

誰だって自分に親切にしてくれた人をよく覚えているもんだ。人に親切にすべきだ思っているけど、なかなかできない。これを生涯かけてやってみたっていいはずだ。

じゃあ、なんでなかなかできないのか。なぜ親切にできないのか。

ぼくはこう思う。

ひよつとしたらそもそも生物学的に思い込みがあるのかもしれない。

《思い込み その1》

自分は世界の中心だ。
だから、自分の物語だけが唯一の物語で一番面白い。

《思い込み その2》

自分は世界を超越している。
犬もブランコもネブラスカ州も低く立ちこめる雲も他人も、眼中にない。

《思い込み その3》

自分は不死。

死の存在は認めるけれど、自分だけは死なない。

頭ではそんなことはないとわかっている。でも、無意識にそう思い込んで生きている。だから、自分の気持ちを優先して、他の人は後回し。本当はもつと周りに気を配り、分け隔てなく優しくしたいのに。

ではどうしたらいいのか。どうやったら親切になれるのか。自己中ではなく、広い心で人を愛し、口先だけでなく行動できるのか。なかなか難しい。残り時間で話せるといいんだけど。

まず知ってもらいたいのは、方法はあるということだ。振り返ってみれば、自分が親切だったり、不親切だったりする時期があったことがわかる。なんでそうだったのかは思い当たるだろう。なぜ親切にできたのか。教育を受けたら、芸術に身を浸したり、祈りを捧げたり、瞑想にふけったり、親しい友と語ったり。そんなことが親切な心呼び覚ます。精神的なよりどころを持つのもいい。先人から学ぶことで、答えが見つかるかもしれない。

親切ついてもたやすくできそうだけど、そうはいかない。きりがないから。

でも救いはある。歳をとるとだれでも自然に親切になるもんだ。我こそは、といっていることが、ばかばかしくなる。大事な人ができることで、これまでの身勝手さに気づかされる。にっちもさっちもいなくなつたとき、誰かに助けられ、人のありがたみを感じる。親しい人がこの世からいなくなると、やがては自分の番だと思ふ。いつかはそうなる。歳をとると人は自分よりも、他人を愛せるようになる。そういうものなんだ。シラキユース大が生んだ詩人ハイデン・カルスは晩年こういった。「今ではどんなものにも愛を感じる」

きみたちの未来を思い描いてごらん。歳を重ねながら、自分より人を愛するようになる。愛することが自分の生き方になる。子供ができたら、自分なんてどうでもよくなる。子供のためなら、自分がどうなろうとかまわない。今日きみたちのご両親が嬉しくてたまらないのもわかるだろう。長年の願いが叶ったからだ。君たちは努力して卒業を迎えた。一人前になったきみたちは、前途洋々だ。おめでとう。

若いときは、うまくいくだろうか、いい人生が送れるだろうかと、試行錯誤する。きみたちの世代には成功への道のりがあった。高校で頑張つて、良い大学に入る。良い大学に入ったら、良い仕事につく。そして良い仕事にいたら、というふうには。

それでいいんだ。親切にするためには、まず自分を高めること。真剣に何かに取り組み、何かを成し遂げてみる、夢を追う、そんな時期が必要なんだ。できるところまでやるんだ。

でも、自分が成長している実感を得るのは難しい。なぜならどんなことでも、うまくいったと思ったとたん、次の目標がみえてくる。さらに高い山に登りたくなる。ただ、うまくいくことだけが人生の目標になり、もつと大切なことが見落とされる。

最後に一つアドバイス。歳を取ると親切になるといえて、待っていてはだめだ。すぐに心がけよう。ほくたちの中には自己愛という病が潜んでいる。これは治せる。必死になって治すんだ。「反自己愛薬」を生涯かけて探し続けるんだ。

恐れず何でもやってみること。旅行、金儲け、出世、改革、指導、恋。財産を築き、失うこと、ジャングルの川で裸で泳ぐこと（サルの糞には気をつけよう）。人生には人に親切になんかできない時期もあるだろう。でも、人生の大きな目標を胸に、自分を卑小にするようなことを避ける。心の奥にある魂は明るく輝いていると信じるんだ。

シェイクスピアやガンジーやマザー・テレサにも引けを取らない。すべての障害を超えて、この輝ける魂に近づくんのだ。魂はあると信じ、それを知り、大切に育て、人とわかち合うんだ。

今から八十年後、きみたちが百歳のとき、ぼくは百三十四歳。うんざりするほど親切で愛に満ちているはずだ。そしたら、連絡してくれ。人生はどうだったか。とても素晴らしかったといつてほしい。

おめでとう。卒業生のみんな。君たちの幸せを祈るよ。素晴らしい人生を。

三、ビル・ワターソンについて

次に一九九〇年にケニヨン大学卒業式で行われたコメンズメントスピーチのスピーカー、ビル・ワターソンを紹介する。

ケニヨン大学は一八二四年創立の小規模なりベラルアーツカレッジであり、特に心理学、歴史学、英語学などの教育には定評がある。この大学の卒業式でのコメンズメントスピーチには感動的なものが多く、タイム誌やネット上のコメンズメントスピーチ評論サイトなどで高い評価のスピーチとして紹介されることがある。筆者たちは、以前には同大で行われたデビッド・フォスター・ウォレスのコメンズメントスピーチ「水って何？」の翻訳を紹介しているが、今回紹介するワターソンのコメンズメントスピーチもウォレスのスピーチ同様、高い評価を受けたものである。最初に、ビル・ワターソンの経歴を簡単に述べる。

ビル・ワターソンはアメリカのコミック漫画家である（写真6）。『カルビンとホップズ』と言う作品を一九八五年から一九九五年まで十年間にわたり発表した。この作品の主人公はカルビンと言う六歳の男の子で、その名前は

プロテスタント運動の中心人物であるジョン・カルビンにちなんでいる。もう一人の主人公であるのがホップズ。英国の社会思想家トマス・ホップズにちなんだ名前を持つトラのぬいぐるみである。主人公カルビンとホップズは親友であり、いたずら仲間であり、時には人生を深遠な視点から省察する同志である。カルビンはホップズを縫いぐるみではなく、本物のトラだと思い、時々牙をむくその姿に畏敬の念を抱いている。このコミックにはその他に、カルビンの両親、ベビーシッター、近所の子供、同級生のいじめっ子や先生などが登場し、日々の出来事が時にはシニカルに時には無邪気に描かれる。主人公であるカルビンは想像力が豊かで、嫌いな事は宿題と用事を言いつけられること、苦手なことは女の子と付き合うこと。題材にはワターソン自身の生活や体験が用いられ、家族や友人が登場人物のモデルとして使われた。

ワターソンは一九五八年にワシントンDCで生まれた。六才で母方の故郷であるオハイオ州に転居し、田舎ののんびりした環境で育った。彼は『ピーナツ』の作者であるチャールズ・シュルツや、『クレージーキャッツ』のジョージ・ハリマンなどの漫画から強い刺激と影響を受けて自らも漫画の世界を志すようになった。早くも小学校の高学年で創作漫画を発表した。中学高校時代には漫画同人誌を発行したり、学校の刊行物に漫画を投稿したりと、漫画を描くことを彼の生活の一部にしていた。

やがて、ケニオン大学に入学すると政治風刺漫画家ジム・ボルグマンに憧れ、同じような漫画を書くことを志した。一九八〇年にケニオン大学を卒業するとシンシナチポスト紙に採用されたが、契約満了を待たず



写真6 制作中のビル・ワターソン 2014年6月11日
The Beat Comics Culture 11, June 2014
<http://comicsbeat.com/bill-watterson-will-draw-the-angouleme-festival-poster-and-more-sightings/> (2014年8月10日取得)

に解雇されてしまう。ワターソンの作風が政治風刺漫画にはふさわしいものではなく、また、シンシナチの政治状況に彼が疎く知識や人脈がなかったからであった。その後、広告デザイナーの職に就く傍ら、コミック漫画を描いては、発表の機会を求めて各紙に送付していた。そして、やっと一九八五年に新聞に掲載されることが決まった。それが『カルビンとホップズ』だった。

この作品が掲載が始まるとすぐに大人気になり、全米、続いては全世界に配信され、一時は二四〇〇紙以上の新聞に掲載された。この作品によって彼は数々の賞を受賞している。一九八六年に最年少で全米漫画家協会の年間最優秀漫画家ルーベン賞に輝いたのを皮切りに、毎年のように受賞し、一九九二年には、フランスにおいて最も格式のあるアングレーム国際漫画祭で最高作品賞に輝いた。

『カルビンとホップズ』が有名になると、子供向けの商品を販売する会社などから、商品に『カルビンとホップズ』のキャラクターを使いたいという申し出が殺到した。人気キャラクターを使った学用品、文房具、衣類、小物などを販売すると大きな売り上げが見込めるので、登場人物のキャラクター使用料として莫大な金額が提示された。企業はもちろん、エージェントとして介入する配信会社も強くタイアップの実現を希望した。人気漫画のキャラクターが商品に使用されるのは特にアメリカにおいては普通のことだ。『ピーナッツ』の登場人物であるスヌーピーやチャーリーやルーシー、『トムとジェリー』やディズニーの映画や漫画の主人公などはTシャツ、マグカップ、シール、弁当箱などによく見かけるものであった。

しかし、企業や配信会社の度重なる要請にもワターソンは首を縦に振らなかつた。彼は自分の作品の登場人物は、その作品の中だけの存在であり、商品化されるとその独自性が保持できないと考えた。ワターソンは、内容的にも技術的にも完成度の高い作品作りを目指していた。それは、クラシック音楽やバレエ、文学などの媒体で表現され

ただのだけが芸術ではなく、どのような表現手段でもそれ自体に高い価値があるものが芸術作品だと彼が考えていたからだ。彼には、自分は漫画という表現手段で芸術作品を制作しているという自負があった。その作品が大量生産される商品に利用されるのは、彼の主義に反するものだった。

企業や配信会社は執拗に商品化を持ち掛けてきた。ワターソンは明らかに不利な戦いを強いられた。というのは、一九八五年の『カルビンとホップズ』掲載開始時の契約では、配信会社の意向で作者の同意なく登場人物のキャラクターが商品に使用できるようになっていたのだった。彼は、その条項には気が付かないまま契約を結んでいた。それゆえ、キャラクターの商品使用を阻止するためには膨大な時間と

労力を費やさざるを得なかった。その過程で、コミック漫画を短時間で大量に作成するために、工場作業のような分業や簡略化された作品が求められるアメリカ漫画界の風潮にも疑問を抱きだした。一九九一年には、この交渉のストレスで九か月間、漫画の制作が出来ずに、休載状態が続いた。しかし、やがて、ワターソンの主張が認められ、『カルビンとホップズ』キャラクターの商品化の話は立ち消えになった。

一九九五年の十二月三十一日をもって、『カルビンとホップズ』は最終回を迎えた(写真7)。最終回では主人公たちの言葉を借りて彼自身^{*7}の気持ちがこのように表現されていた。



写真7 Calvin & Hobbes, Dec. 31, 1995

カルビンとホップズの最終回 1995年12月31日

<http://www.gocomics.com/calvinandhobbes/1995/12/31#.U-hwtrmKCUk> (2014年8月10日取得)

カルビン「わア 一晩で雪がつもったね。すごいね！」

ホップズ「一面 塗り替えられたね。ピカピカの新世界だ」

カルビン「うん。新年だ。ワクワクするね」

ホップズ「真っ白な雪のキャンバスに好きなように漫画を描こう！」

カルビン「なにをかいてもいいんだね」

「ホップズ。これって魔法の世界だね」

「さあ 探検に出かけよう」

そして、ワターソンは以下のような文章を読者に向けて発表している。^{*8}

読者の皆様

今年末で、カルビンとホップズは最終回です。前から考えてきたことであり、そう決めるまでには葛藤もあり、悲しい気持ちです。毎日の締め切りを守りながら新聞コミック欄の限られた小さいスペース内で出来ることはやりつくしました。もっとじっくり考える時間を持ち、作品制作の点で妥協することなく仕事を続けることが重要です。将来の予定はまだありませんが、ユニバーサル社との配信に関する関係は保ちます。多くの新聞に『カルビンとホップズ』が掲載されたのは私の誇りです。この十年間、読者の皆様のご支持とご支援のおかげでやってこられました。この漫画を描くことは誇りであり喜びでした。その機会を与えてい

ただけたことを感謝します【遠藤訳】。

連載を終えた後、ワターソンは『カルビンとホップズ』の選集を数冊出版した。それ以外は公の場に出ることはなく、インタビュアーにも応じずにひっそりと姿を消した。しかし、その後も彼の作品に対する関心は高く、彼の作品の登場人物のセリフはユーモアの中に含蓄があると、しばしば引用されてきた。ここではそのようなセリフを三つ紹介する。

一 ピーナッツバターをコントロールできないなら、自分の人生をコントロールすることなんてできるはずがない。

二 子供の頃を懐かしんでいる人はもう子供ではない。

三 神様は私に何かを達成するよう、この世に生を与えてくれた。今のところ、何も達成していないので、まだまだ私は死なないだろう。

やがて、彼は少しずつ公の場に姿を現すようになり、『カルビンとホップズ』の展覧会ではインタビュアーに^{*9}^{*10}応じた。二〇一四年にはコミック漫画家のコミック業界の現状に対する意見を集めたドキュメンタリー映画のポスターを制作し周囲を驚かせた。^{*11}そして、パーキンソン病治療研究への資金集めを目的として、ワシントンポスト紙に、二〇

一四年の六月六日から三日間、彼のコミックが掲載されたのだった（写真8）。彼の作品の人気は現在でも根強く、次回作を待ち望む人々が多くいる。次には、彼のケニヨン大学でのコメントスメントスピーチの翻訳を紹介する。

【遠藤】

四、ビル・ワターソンのコメントスメントスピーチ

（一九九〇年五月二十日 ケニヨン大学にて*₁₂）（写真9）

社会をみて逃げ出した男が考える社会について

ビル・ワターソン

翻訳 小笠原はるの・遠藤昌子

今でもよくケニヨン大学の夢をみるんだ。新学期の授業に行く途中、郵便がきていないかメールボックスをチェックしていく。突然、自分の予定が思い出せなくなるんだ。何の授業をとっていたのかも、どこに行くべきなのかもわからない。

校舎の階段をのぼりながら、ほくは気づく。メールボックスの鍵を忘れてきたと。それに番号も覚えていない。みんなから手紙が来ているはずだ。でも、取り出せない。いらいらしてきた。大学の中央通りを歩きながら、頭を掻きむしる。「あと何年で卒業？ いや、卒業はしたはずだ。いや、ほくって今何歳？」そして目覚める。



写真8 パーキンソン病資金集めのためにワシントンポスト紙に掲載されたビル・ワターソンの最新作（2014年6月6日）

The Washington Post, June 6, 2014

<http://www.washingtonpost.com/news/comic-riffs/wp/2014/06/06/exclusive-calvin-and-hobbes-creator-bill-watterson-returns-to-the-comics-page-to-offer-a-few-pearls-gems/>（2014年8月10日取得）

ケニヨンでの四年間は、栄養たっぷりだった。ケニヨン尽くしで、これからもげっぷが出るだろう。ぼくがこんな夢をみるのも、ケニオンでの日々が素晴らしかったから。どこに向かっているのか、何をしようとしているのかわからないときにこそ経験という食べ物が脳に必要なんだ。

ぼくはちょうど十年前に卒業した。たいした人生経験はしていない。でも、自分の卒業式のスピーチは覚えていないから、ぼくでもいいかと思った。三十分もたてば、きみたちもぼくの話をおぼろげに忘れるだろうから。

大学二年のころに、ぼくは寮の部屋の天井にシステイナ礼拝堂のミケランジェロの壁画『アダムの誕生』を描こうと思った。椅子に立てば天井に届いた。そして、テープで描く場所に印をつけ、升線を引いて、美術の本を見ながら、描きはじめた。

頭の上に手を伸ばして描くのは大変だったので、友人が工夫して、ベッドに二つの椅子を積み重ねて、足場をこしらえてくれた。それから、ラウンジから持ってきたテーブルを、椅子とクローゼットの上にわたしてくれた。ベッドから椅子にうつって、テーブルにあがると、ちょうどいい感じに絵の下七十センチに横たわることができた。ルームメイトからペンキをわたしてもらって、ぼくは一気に何時間も描いた。

絵が完成したのは、学年末だった。そのころ、絵の腕前はひどく、色のセンスもテクニクもなかった。それなのにルネッサンス傑作を出現させてしまったのだ。しかもビールの空き缶とたまった洗濯物のすえた匂いが漂う部屋に。

その絵のおかげでぼくの部屋には壮大なる宇宙の魂が宿り、人間の営みがちっ



写真9 ビル・ウォーターソンのスピーチに登場するケニヨン大学中央通り
ケニヨン大学ホームページ
<http://www.kenyon.edu/virtual-tour/locations/middle-path/>
(2014年8月10日取得)

ぼけに思えた。課題レポートで書くこうとしていた英国詩人の華美な言葉が戯言に思えた。頭上に燦然と輝く神がいて、生命の光を放っているんだから。

許可をとらずに始めてしまったけど、あんまりいい出来だったので、なんとか後輩に残せないかと友人と策を練って、まずは学生寮の担当者にあたった。思っていた通り、彼はなぜ年度末も近いのにこんな凝った絵を描きたいのかときいてきた。ケニヨンの二年生ともなれば、それらしい説明はできた。でもきつと事後承諾だということがわかっていたんだと思う。描くのはいいけど、年度末には元通りに塗り直すことを約束させられた。しょうがないから、塗り直したよ。

傑作を残すことはできなかったけれども、大学時代の一番の想い出になった。いわれたことではなく、自分がやりたくてたまらないことをやったんだから。大学の課題の制作や論文にはこんなに打ち込まなかった。

自分がやりたいことならどんなにたらくともできるものだ。ジョン・スチュワート・ミルのせいにしたくないけれど、今の時代は実用的な勉強ばかりがもてはやされる。ぼくが漫画家としてやってきて一つだけ学んだことがあるとすれば、創造と幸福に必要なのは思いっきり遊ぶこと。ぼくの仕事はだから一日に一個、新しいアイデアを生むことなんだ。

面白いことを毎日たくさん考えなければならぬ仕事につくと、いかに自分がつまらないやつかと思ひ知らされる。毎日毎日何年間も描き続けるためには、常に未知の世界に足をつっこんでいなければならぬ。そうするため、遊び心を持つことだ。

ぼくたちは、休み方を教えられていない。ただ、だからだしてしまふ。リラックスするというと、テレビの前に

腰をおろして、ばかばかしい番組を観て、頭を空っぽにすることだと思っている人も多いけれど、思考回路を閉ざすことで、新しい考えは生まれえない。車のバッテリーのようなもので、使うことで充電される。元気な自分を取り戻し、新しい世界を広げていける。

考えてごらん。ぼくたちは日々の雑用をこなすことに追われている。

考えてごらん。ぼくたちは何の疑問もたずに日々を過ごしている。

考えてごらん。ぼくたちは自分の気持ちより、他人の期待に応えようとしてしまう。

考えてごらん。ぼくたちは本を読む貴重な時間さえ惜しんでしまう。

学校では、毎日新しいことを教えてもらえる。でも、いったん社会に出たら誰も教えてくれない。自分で探さなければいけなくなる。考えなくていい仕事なら別だけど。でも、君たちは頭がよくて能力があるんだから、自分の考えや表現を生みだしていくんだ。そのためには自分の心を遊ばせなければならぬ。

ぼくは自分が六歳の子供になったつもりで、おもしろいことを探している。心を遊ばせていると、一つのことから次々、別の考えが浮かんでくる。恐竜にはずいぶん詳しくなった。恐竜ネタでぎりぎり締め切りに間に合わせたこともあった。

ぼくは面白がりやで知りがり。学ぶことは楽しい。子供のままで新しいことを面白いと思っていれば、人生でへこむことがあっても乗り越えられる。

じゃあ、社会ってどんなところなんだ。学食より飯はうまいだろうが、あとはたいしたことがない。

卒業してから数年間、ぼくにはいい思い出がない。半年前にここでスピーチをしていたら、きみたちに留年を勧めたと思う。でも、もう遅いね。ぼくからのアドバイスはそれくらいだったのに。

ぼくの場合は幸運なことにとりあえず就職が決まっていた。大学時代の四年間、大学新聞に風刺漫画を描いていたおかげで、シンシナティ・ポストの漫画編集担当として働くことになった。ロースクールに進む友たちといえば、悪名高き初年度の授業に恐れをなしていた。大学以外では使い物にならない歴史の学位でなんとか就職しようと思悪闘している友たちもいた。だからぼくは得意満面さ。

でも、入社したとたん、ぼくの上司はぼくを雇ったことを後悔したみたいだ。夏の終わりになるとぼくは解雇通知を受け、冬には失業していた。卒業一年後には一文無しで両親の家にころがりこんだ。ぼくのおやじはケニヨン大学に学費を返してほしいと文句をいっていた。

出ばなをくじかれて、ぼくは自分と向き合うことになった。ぼくには風刺漫画を描く素質はなかった。政治には興味がなく、もともと好きだったコミック漫画に戻った。

それから長い間、ぼくの漫画は認めてもらえなかった。だから生活のために働いた。

生活のための仕事とはやりたくない仕事のことだ。ぼくはコンビニの地下室で自動車や食料雑貨の広告を作ることになった。長い拘束時間の一瞬たりとも楽しいと思わなかった。同じくとらわれの身の同僚は、いかに働かない

で残業代を稼げるか、タイムカードの押し方だけはうまかった。

ひどいもんだよ。退社時間がきても、タイムカードの機械の前でねばって、勤務時間を長くみせかけようとする。ほくも中古車の修理代金をかせぐために、二度同じことをした。

ケニヨン大学にいたときは、メロドラマの話なんてしているやつはいなかった。でも、会社に入ってみると話題はそれだけ。

ともかく、この仕事について数ヶ月すると、ほくは知的な刺激がほしくなった。だから昼休みに、大学生のときに読み切れなかった政治学の本を読みはじめた。かなり面白いものもあった。ただ食べるだけのために、好きでもないことをしていると、なんとかからっぽで味気のない人生なんだと思う。

ソローは言った。

「人々は密かに絶望しながら生きる」

よく引き合いに出されることばだけど、歳をとるにつれて身にしみる。実際、ほくは明白な絶望を抱えていた。これから一生、安売り広告を描いて暮らすのかと思えたとき、そのうち浮かび上がれるさ、と友だちが慰めてくれた。でも、浮かびあがれずに、海の底に沈むことだってありえる。

一夜にして成功するなんてありえない。成功や失敗にとらわれず、やっていることを楽しむんだ。やってみて、はじめでどこに到着したのかわかる。到着してみて、そうだ、ここに向かっていたんだと思う。寄り道はするもんだから、途中の景色を楽しもう。

描いても描いても仕事はこななかった。五年間もダメといわれて、まだ続けていたのは、幻想ともいえる自信があったのか、描くことが好きだったか、そのどちらかだ。ぼくは描くことが好きだった。

収入にならないのに五年も漫画を描いていてわかったのは、漫画を描くのがお金のためではなかったということ。売れだしてから、その気持ちは変わらなかった。

売れだしたら、売れだしたで、予想外の方向に進んでしまった。もともと漫画が好きで漫画家にはなりたかったけれど、漫画を商売にはしたくなかった。まさかぼくの描いたコミック漫画が、血も涙もない企業のえじきになるとは思わなかった。彼らは商業主義のもと、ぼくの倫理観に反することをさせようとしたんだ。

商業主義に理想なんていらぬ。必要なのは金に対する強欲さと売り込みかただ。

ぼくの漫画に人気が出たので、その人気にあやかろうとする企業がでてきた。その対応に漫画を描くのと同じくらしいの労力が必要だった。漫画を商品化すると年商一二〇億ドルにもなるので、分け前が入る出版社は当然よろこんだ。でも、漫画がどう利用されるか考えれば考えるほど、ぼくが漫画を描きたい理由と違うと思えてきた。

売れることは、買うことだ。つまり、何かを売るということは、市場の価値や決まりや価格を買い入れ、従うということだ。

今ある金儲けの機会を受け入れると、金儲け主義の企業のいいなりになり、ぼくの声がかき消される。ぼくが漫画を描くのは売るためではなく、何かを伝えるためなのに。手間のかかる作業が大量生産や経済効率の名の下にないがしろにされる。どんな漫画を描くかも会議で決められてしまう。創造的な仕事も金のための仕事になりさがる。芸術が商業になる。金がぼくがやっていることすべてを決めてしまう。

出版社は、金になる漫画を描けとぼくにいう。安上がりで、大量生産ができる漫画だ。そうすると、前と同じで

食べるための仕事になりさがってしまふ。ぼくがつくったキャラクターはテレビ広告やTシャツに使われ、そのキャラクターにこめた意味がなくなってしまう。

そういうわけで、そんな申し出は、いとも簡単に断つてやるうと思つたが、相手も簡単には引き下がらない。そうやって、かれこれ三年以上戦つている。これがアメリカのビジネスなんだ。いやらしい利益追従の前には、良心のかけらもない。

君たちも人生や仕事でさまざまなジレンマを抱えるだろう。一人ひとり望むことや必要なことは違つていて、自分で見つけ出さない限り、いつも受け身で満たされない人生になってしまう。時には自分の望みに反して妥協させられそうになる。そこでどうするかだ。どういう行動をとるかで、自分が何者かがわかる。人生に自分が何を望むかを考えること。自分にとつての成功とは、世間という成功とは限らない。

ロースクール、ビジネススクール、医学部、そして大学院を出たら、初任給からして高いはずだ。運が良ければ、生きているうちに、学生ローンが返せるだろう。でも、うらやましがられる仕事を持つことが、幸せに生きることではない。

難しいかもしれないけど、自分の価値観にそつて、魂を満たす生活を送りたいものだ。物を持てば持つほどよしとする社会では、その枠から外れて好きなことだけをして暮らしていたら、危険分子とまではいかななくても、変人に思われる。野心とは、成功への階段をのぼりつめることだと考えられている。仕事は最低限だけして、やりたいことのために時間をつかうと、ダメなやつだと思われる。男が子育てのために、仕事をやめて家庭に入ると、もつたないといわれる。肩書きと給料だけで、人間の価値が決められるかのように。

偉くなれ、現状に甘んじるな、そのままの自分ではいけない、今やつていることだけではだめだ、時には遠回し

に、時にははっきり何度も何度もいわれるだろう。もっと自分を高く売り込めと、何度もいわれているうちにその気になることもあるだろう。

他人の尺度ではなく、自分の尺度でなければならない。簡単ではないが、できないことではない。そのためには労を惜しむな。

遙か古代の石に刻まれた偉大な哲学者の思想に触れても、就職には役に立たない。でもそれによって、人生の真実、目的、意味について考えられるようになったら、自分のなかに、何かと役立つ羅針盤を持っているのと同じだ。

ケニオンで種がまかれたことにあとで気づくはずだ。ケニオンでの日々で多くを学んできたはずだ。少なくともルームメイトのおかげで、人間というものの醜さをいやというほど思い知っただろうし、授業では、おおいに刺激を受け、深く考えさせられただろう。その考えをあたためていってほしい。そうすれば、人生に深い意味を見いだすことができ、魂が満たされる。知識を学ぶことではなく、何を自分に問いかけるかを学んだことで、世の中に出る準備ができている。

ケニオンを卒業するのだから、こわいものなしだ。これからも充実した幸せな人生を送ってほしい。卒業おめでとう。

(本稿は平成二十六年度札幌大学研究助成による成果の一部である。)

注釈

- * 1 岸本佐知子 訳者あとがき 『短くて恐ろしいフィルの時代』角川書店、二〇一二年、一四〇ページ
- * 2 Joel Lovell, “George Saunders Has Written the Best Book You’ll Read This Year.” *The New York Times*, January 3, 2013
[http://www.nytimes.com/2013/01/06/magazine/george-saunders-just-wrote-the-best-book-youll-read-this-year.html?](http://www.nytimes.com/2013/01/06/magazine/george-saunders-just-wrote-the-best-book-youll-read-this-year.html?pagewanted=all&_r=0)
[pagewanted=all&_r=0](http://www.nytimes.com/2013/01/06/magazine/george-saunders-just-wrote-the-best-book-youll-read-this-year.html?pagewanted=all&_r=0) (二〇一四年十一月十七日取得)
- * 3 ジョージ・ソウンダース著 青山南訳 『フィリップ村のとてもしつこいガッパードを』いんぷろ社、二〇〇三年、四十二ページ
- * 4 ジョージ・ソウンダース著 岸本佐知子訳 『短くて恐ろしいフィルの時代』五ページ
- * 5 『短くて恐ろしいフィルの時代』十一ページ
- * 6 Joel Lovell, “George Saunders’s Advice to Graduates.” *The New York Times*, July 31, 2013
<http://6thfloor.blogs.nytimes.com/2013/07/31/george-saunders-advice-to-graduates/> (二〇一四年十一月十七日取得)
- * 7 一九九五年十二月三十一日カルビンとホブズ 最終回の作品 <http://www.gocomics.com/calvinandhobbes/1995/12/31#U-nx5bnkCkUk> (二〇一四年八月十日取得)
- * 8 一九九五年十一月九日 ビル・ワターソンの読者へのメッセージ Darlin’s Library for the Calvin & Hobbs Research, <http://ignatz.brinkster.net/cimages/deareditor.jpg> (二〇一四年八月十日取得)
- * 9 2010 interview by John Campanelli, *The Plain Dealer*
http://www.cleveland.com/living/index.ssf/2010/02/bill_watterson_creator_of_belo.html (二〇一四年八月十日取得)
- * 10 “The Tiger Strikes Again.” *The Washington Post*, October 4, 2005
<http://www.washingtonpost.com/wp-dyn/content/article/2005/10/03/AR2005100301754.html> (二〇一四年八月十日取得)
- * 11 “Bill Watterson Talks: For new documentary, cartoonist offers his first public cartoon since ending ‘Calvin and Hobbes.’” *The Washington Post*, February 26, 2014
<http://www.washingtonpost.com/news/comic-rips/wp/2014/02/26/bill-watterson-talks-for-documentary-cartoonist-offers-his-first-public-cartoon-since-ending-calvin-and-hobbes/> (二〇一四年八月十日取得)
- * 12 Bill Watterson, “Some Thoughts on the Real World by One Who Glimpsed It and Fled.” May 20, 1990
<http://web.mit.edu/jmorzins/www/C-H-speech.html> (二〇一四年八月十日取得)

参考文献

- ジョージ・ソウンダース著 法村里絵訳『パストリア』角川書店、二〇〇二年
- ジョージ・ソウンダース著 青山南訳『フィリップ村のともしつこいガッパードも』いそつぱ社、二〇〇三年
- ジョージ・ソウンダース著 岸本佐知子訳『短くて恐ろしいファイルの時代』角川書店、二〇一一年
- George Saunders, *Civilwarland in Bad Decline*, New York: Riverhead Books, 1996
- George Saunders, *Congratulations, by the Way: Some Thoughts on Kindness*, New York: Random House, 2014
- George Saunders, *Pastoralia*, New York: Penguin Group, 2000
- George Saunders, *Tenth of December*, New York: Bloomsbury, 2013
- George Saunders, *The Brief and Frightening Reign of Phil*, New York: Riverhead Books, 2005
- George Saunders, *The Very Persistent Gappers of Frip*, New York: Random House, 2000